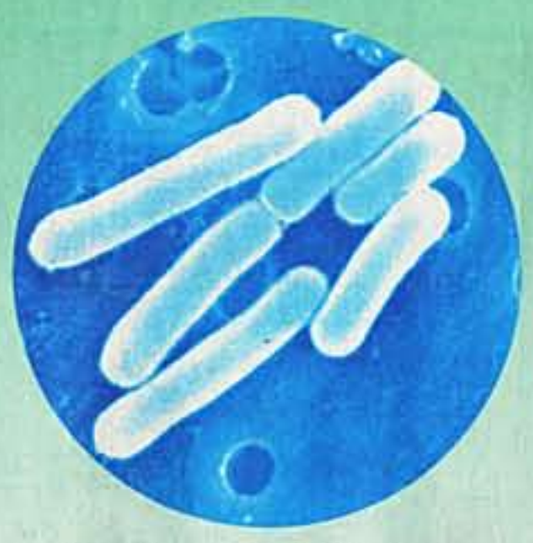
広告特集
企画・制作 朝日新聞社広告局

発見!!乳酸菌「L-92株」の新しい力

アトピー性皮膚炎への効果を学会で発表



抗アレルギー作用の解明が進む乳酸菌「ラクトバチルス・アシドフィルス L-92株」の電子顕微鏡写真

生活環境の変化や疲労・ストレスなどの影響によって、何らかのアレルギー症状をかかえる人が増えています。アレルギー専門医として総合的な生活指導を通じ、患者の体質改善を図る治療に長く取り組んでいる鳥居新平先生に、腸管免疫の働きの大切さと、抗アレルギー作用が注目される乳酸菌「L-92株」のお話をうかがいました。

発症の発端は免疫バランスの崩れ 1

くしゃみや鼻水が出たり、体があちこちかゆくなったりするアレルギー症状は、私たちの体に備わる免疫の仕組みがバランスを崩すことで発現します。外界から侵入する異物を排除して、病気を防いだり体調を維持するように働くのが免疫です。いわゆるアレルギー体質の人は、IgE抗体などとアレルギーに関与する抗体が体内にできやすく、また、本来備わっているはずの発現にブレーキをかける機構があまり働きません。

このIgE抗体は、血液の流れに乗って体内を巡り、皮膚・鼻・気管支の粘膜下などにあるマスト細胞と結合します。それらの部位で適応する抗原(=アレルゲン)と出合うと反応し、ヒスタミンなどの化学伝達物質を放出します。これがじんましん、アトピー性皮膚炎、アレルギー性鼻炎、ぜん息発作などの発症を誘引するのです。

よくアレルギーの根治は難しいといわれるのは、こうした発症までのメカニズムのうち、有効な治療法が確立しているのは、最後の化学伝達物質の放出を抑える段階にほぼ限られているからです。もちろん症状別にさまざまな抗アレルギー薬が開発され、的確な効果を上げています。しかし、より根本的にアレルギーに負けない体質を得るとなると、場当たり的な対症療法では追いつかない。それが、この病気の治療に40年以上携わってきた私の実感です。

ならば、どう対処するべきか――私の臨床経験のなかでも症例数の多いアトピー性皮膚炎の場合でお話ししましょう。

アトピー性皮膚炎が大人に起こるワケ 2

アトピーといえば昔は子どもの病気で、長じれば自然に治るものでした。ところが、ある時期から成人でも発症・再発するケースが増えたので原因を調べたところ、皮膚のバリアー機能が低下して乾燥肌、敏感肌の人が多くなったことがわかりました。

乾燥肌や敏感肌というのは、皮膚表面の皮脂腺から出る脂と、その上の水の膜がはがれて、いわば皮膚がむき出しの状態で外界にさらされています。こうなると、さまざまな異物がじかに皮膚を通り抜けて侵入しますから、IgE抗体とアレルゲンの反応が亢進して、大人も容易にアトピー性皮膚炎にかかるようになったわけです。

こうした場合に大事なのは、患者さんは皮膚炎のかゆみや湿しんで現に悩んでおられるのですから、第一義的に症状を抑制するための処置をすることです。副腎皮質ホルモンなどの抗炎症剤を含んだ軟膏やクリームを処方するのがふつうです。

それで急場をしのいだら、次にむき出しになった皮膚のバリアー機能を回復しなければなりません。例えば、洗う効果の強い洗剤やシャンプーなどに含まれる界面活性剤が肌荒れの原因になりがちなので、よく洗い落とすか、刺激の少ない石鹸を使うように指導します。また、患者さんの肌の質に合った化粧品(保湿作用がある)を探すなどして、スキンケアを徹底してもらう。以上が、体の外側から行えるアトピー対策といえるでしょう。

体の外から、そして内側からもアトピー対策を 3

そして体の内側、ことに腸管免疫の働きを活性化して、アレルギーに負けない体質をつくっていくことが大変に重要です。

アトピー性皮膚炎が子どもに多いのは、未熟な免疫機構ではIgE抗体がつくられやすく、元来アレルギーにかかりやすいからです。成長につれて免疫機構が整ってくるとアトピーも自然に治る、それがかつてのセオリーだったのですが、今日では困ったことに、大人になっても免疫バランスが改善しない傾向が多く見られるようになりました。

やや専門的な領域になりますが、左上の図のように免疫細胞のTh2(アレルギー因子)がTh1(感染予防因子)に対して優位な状態にあるとき、IgE抗体が多くつくられてアレルギーの発現に至ります。以前は、大人になればTh1/Th2バランスが整ってアレルギーも沈静化したのですが、昨今はTh2が優位のまま動かず、細菌感染には弱く、アレルギー体質を抱えたままという大人が増えてきているわけです。

そこで、肝心のTh1/Th2バランスを改善するための方策を重々検討した結果、ある種の乳酸菌にその働きがあることを私は突き止めて、その有用性を確認するための試験に取りかかりました。それが、数多くの乳酸菌のうちのひとつ、「ラクトバチルス・アシドフィルス L-92株」(以下「L-92株」に略)です。

乳酸菌「ラクトバチルス・アシドフィルス L-92株」の効果を確認 4

乳酸菌「L-92株」は、かねてアレルギー性鼻炎の症状を改善する試験結果が得られており、昨春、私も参加してアトピー性皮膚炎患者を対象に行った試験では、「L-92株」がアトピー性皮膚炎の症状緩和にも有用である可能性が見いだされました。

そして今夏には、その有用性を科学的に検証するため、1歳から12歳のアトピー性皮膚炎患者59人を対象に二重盲検試験を実施。「L-92株」の粉末を摂取するグループ(30人)と、擬似食品を摂取するグループ(29人)とで8週間にわたって経過を見たところ、前者で皮膚症状の改善が有意に大きく、「L-92株」がアトピー性皮膚炎に効果を示すことを確認しました(左の図)。

この成果は、9月に開かれた「2007年度日本臨床腸内微生物学会」において私自身が発表し、席上、乳酸菌のもつ抗アレルギー作用と、それによる腸管免疫の活性化が、今後のアレルギー対策に新たな道筋をつけるであろうとの評価を得ました。

乳酸菌「L-92株」は、飲料などでも手軽に摂取できます。免疫のバランスを改善することで腸管免疫の働きを本来の状態に回復できれば、それが根本的な体質改善につながることが期待できます。

こうした最新の研究成果も積極的に応用して、どうか、じっくり腰をすえてアレルギーに立ち向かい、強い体質づくりに取り組んでいただければと願っています。

(医)愛生会 総合上飯田第一病院 アレルギー科

医学博士 鳥居 新平先生

とりい・しんぺい●1933年生まれ。信州大学医学部卒業。名古屋大学医学部で博士号を取得し、同付属病院分院小児科科長。専門は臨床栄養学、アレルギー学、小児科学。日本アレルギー学会評議員、日本小児アレルギー学会会長、厚生労働省特定用途食品検討部会委員などを歴任。主な著書に「アレルギーの衣食住チェック」(農文協)、「子どもの食事とアレルギー」(共著/第一出版)など。

*二重盲検試験……本物と擬似食品を準備し、被験者及び試験者には試験に用いるものが本物あるいは擬似食品かわからないようにして試験を行う。このことにより、思い込みによる効果(プラセボ効果)を排除して信頼性のあるデータを探る方法。

❗アレルギーはこうして起こる…

❶ハウスダストや花粉、特定の食物・金属などのアレルゲンが侵入。

❷体内の粘膜などで樹状細胞がアレルゲンを認識する。

❸Th2細胞が優勢な場合、B細胞からIgE抗体が産生・放出される。

❹肥満細胞の表面にIgE抗体が付着。

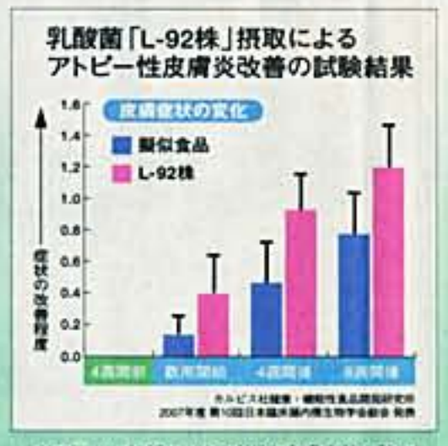
❺アレルゲンの再侵入により肥満細胞がヒスタミンを放出する。

❻アレルギー症状(かゆみ、くしゃみ、鼻水、皮膚の炎症など)が発症。

*肥満細胞……粘膜下組織や血液・リンパなどの結合組織に存在する細胞。免疫反応で重要な役割を担っている。

*樹状細胞……血液および組織中に存在する抗原提示細胞で、自分が取り込んだ抗原を他の免疫系の細胞に伝える役割を持つ。

*B細胞……液性免疫に関与するリンパ球の一種で、抗原に対して抗体を産生する。



*スコア……紅斑やかゆみなどの皮膚症状の強さを表した値。スコアが高いほど症状が改善されている。

提供:カルピス株式会社